

# G.アポリネールの 想像作用について (一)

竹 内 勉 也

はじめに

19世紀の終りから20世紀の初めにかけてフランスの芸術は、おそらく、根本的な、と言っても差し支えないような、大きな変化を遂げた。G.アポリネール Guillaume Apollinaireは1880年に生まれ1918年に没した。そして、彼の文学的活動は1900年ごろから始まり、その主要な作品のうち最後に刊行された『かつて』IL Y Aを区切りとして仮定すれば、1925年まで続いた(言うまでもないことだが、G.アポリネールの諸作品は現在まで様々な形で刊行され続けている)。すなわち、この詩人の活動は、まさしく、フランスの芸術の20世紀初頭の変動期と一致するとも言えよう。

その生涯を通じて発表された諸作品は詩、小説、戯曲(オペラを含む)、美術評論、新聞の連載記事など広い範囲にわたるものであり、当時、活動していた画家たち、音楽家たちに、とりわけ、若い芸術家に影響を与えた。

絵画における立体派cubismeについて、また、フランス現代音楽の発生について考える時、G.アポリネールの存在を見過すことはできないであろう。実際、1911年に刊行された『動物詩集、あるいは、オルフェの行列』LE BESTIAIRE OU CORTÈGE D'ORPHÉEについて見れば、この詩集の木版画を制作したラウル・デュフィ Raul Dufyは、それらの版画を通じて大きく前進したし、後にこの詩集の作品にメロディを付けて歌曲集を発表したF.プーランク Francis Poulencは歌劇『ティレシアスの乳房』LES MAMELLES DE TIRESIAS(これもG.アポリネールの作品である)を含む豊かな作曲活動を展開して行った。

G.アポリネールの影響は、それを受けた若い芸術家たち、各人によって異った現われ方をすることになる。それは、一方では、受け取る側の資質を含めた状況の差異によるものであるが、もう一方では、G.アポリネール自身が広範な領域での表現活動の中で変容していたからである。

ここでは、まず、G.アポリネールの最終期の作品に示されている発想と、そこに到るまでの変容にエネルギーを与え続けたものは何かを考えたい。

なお、この研究の資料を集める際に、跡見学園特別研究費助成を受けたこと、また、跡見学園女子大学短期大学部助教授村田宏氏の御協力をいただいたことを記して感謝の意を表わすものである。

## I

『腐ってゆく魔術師』 *L'Enchanteur pourrissant* (1909) はG.アポリネールの初期の作品である（この小説はA.ドラン André Derainの木版画で飾られている）。作品の末尾に付されている文によれば、初稿は1898年に書き上げられている。すなわち、作者は18歳だったことになる。また、作者自身の手になる広告文には次の部分がある。

G.アポリネールの『腐ってゆく魔術師』は新文学世代の作り出した、もっとも神秘的で、もっとも叙情的な本のひとつである。

この作品を生み出した源は、遠い古代の、われわれの持つ伝統の中のケルトの深みにまでさかのぼるものであり、それを描き出す者としてA.ドランが選ばれた。

造形美術を極めて厳密に改革しようとするドランは木版を使い、挿絵や飾り文字などで本書を飾り、それらはこの本を純然たる芸術的驚異にまで高めている……。

... *L'Enchanteur pourrissant* de Guillaume Apollinaire est un des livres les plus mystérieux et les plus lyriques de la nouvelle génération littéraire.

Cette œuvre, dont les racines s'étendent très loin, jusqu'aux profondeurs celtiques de nos traditions, a trouvé dans André Derain son illustrateur.

Le plus précis réformateur de l'esthétique plastique a gravé le bois des images, des lettrines et des ornements qui font de ce livre une pure merveille artistique. (註1)

作者自身の紹介のように、この作品はメルラン Merlin 伝説によるものであり、主人公メルラン Merlinの誕生から始められる。

……しばらくして、父親は死んだ。その死後、母親は娘に結婚しておくれと頼んだ。しかし、娘は男の姿は見たくないと言って母親の言うことを聞こうとしなかった。そうしているうちに、真暗な夜、悪魔が一人ベッドに入っていた娘のところに忍びこんできた。悪魔はとても優しく娘に言い寄って、「私は決して姿を見せません」と約束した。娘が「あなたは誰なの」と訊ねると悪魔は「私は誰も知らない土地から来た者です。あなたは私の

姿を見ることはできないでしょうし、私も抱いているあなたの姿を見ることはできないでしょう」と答えた。娘が悪魔に触れてみると、その体はとてものがっしりしているのが感じられた。そして、娘は悪魔を思いきり愛し、男の姿は見たくないという彼女の意志を貫いたのだった。そして、そのことは母親にも誰にも話さなかったし、態度も変えなかった。

娘が1カ月ほどの間、こうした生活をしていると、彼女のお腹が大きくなり、男の子が生まれた。皆が仰天した。父親については何も分からなかったし、娘も誰が父親なのか言おうとしなかった。この赤ん坊はメルランと名づけられた。……

... Au bout de quelque temps, le père mourut et, après son trépas, la mère supplia sa fille de prendre un mari, mais celle-ci ne voulut rien entendre. Sur ces entrefaites, il arriva qu'un diable se présenta à la demoiselle en son lit, par la nuit obscure. Il commença à la prier tout doucement et lui promit qu'elle ne le verrait jamais. Et elle lui demanda qui il était: «Je suis, fait-il, un homme venu d'une terre étrangère et, de même que vous ne pourriez voir d'homme, je ne pourrais voir de femme avec laquelle je couchasse.» La demoiselle le tâta et sentit qu'il avait le corps très bien fait. Et elle l'aima extrêmement, accomplit sa volonté et cela tout cela à sa mère et à autrui.

Quand elle eut mené cette vie l'espace d'un mois, elle devint grosse, et lorsqu'elle enfanta, tout le peuple s'émerveilla parce que du père on ne savait rien et elle ne voulait pas le dire. Cet enfant fut un fils et eut nom Merlin. ... (註2)

1880年8月26日ローマで一人の男の子が生まれ、30日に助産婦が戸籍係に出生届を出したが、母親は自分の名前を隠したがついていた。9月29日、アンジェリック・ド・コストロヴィツキ Angélique de Kostrowtzkyが8月26日出生の彼女の息子に洗礼を受けさせた。11月2日、アンジェリック・ド・コストロヴィツキは、それまで別の名前になっていた彼女の息子を実子として認知したいと申し出、息子の名前をギョーム・アルベール・ウラジミール・アレクサンドル・アポリネール Guillaume, Albert, Wladimir, Alexandre, Apollinaire とした。

これらの事実から明らかなように、G.アポリネールは私生児として届け出された。後に、彼自身が友人たちに「自分の父親はナポレオンの血を受け継いだ人間だった」と話していたことも伝えられているが、これは父親が誰なのかを公言できない詩人の思いつき、あるいは、願望だったようである。彼の母親は、確かに、ポーランドの貴族の出身であり、早熟で強情で激情的な女性だった。彼女が詩人を出産した頃、生活を共にしていたのは誰だったかを探し続けた研究者マルセル・アダマ Marcel Adémaのお陰で、詩人の父親は、おそらく、フランスワ・フルジ・ダスペルモン François Flugi d'Aspermont であろうという結論が明らかに

されている。

しかし、仮に、母親から父親が名家の出身であることを話されていたとしても、F.F.ダスペルモンは詩人の母親よりも23歳年上であり、何らかの理由により、公けの届出はしなかったのである。さらに、1885年（詩人は5歳）F.F.ダスペルモンはアンジェリックと別れる。二人の男の子（1882年に弟アルベール Albert が生まれている）を抱えて母親はモナコに住む。そして、父親のいない家族はさまざまな地域に旅行する。1899年、ダスペルモン家からの援助が終る。同年、パリで、この家族に一人の男が加わる。以前、モナコでアンジェリックの知り合いだったジュール・ウェイル Jules Weil である。この男は彼女の死まで関係を持ち続けるが、アンジェリックや子供たちと常に一緒に暮していたわけではない。経済状態の良い時は豪勢な生活をし、時には姿を消してしまう。

『虐殺された詩人』Le Poète assassinéには、アポリネールが工夫を凝らして飾り立ててはいるものの、作者の出生の事実と一致する部分がいくつも書きこまれている。

今や、われわれは（主人公）クロニアマンタルが1889年8月25日、金色の空のナプールで、父親の尻から生まれたことを知っているのだ。戸籍簿がはっきり示している。ただし、市役所に届けが出されたのは翌日の朝だった。（傍点は引用者）

Nous savons maintenant, et les registres de l'état civil sont là pour un coup, qu'il est né du pet paternel, à *La Napoule aux cieux d'or*, le 25 août 1889, mais fut déclaré à la mairie seulement le lendemain matin. (註3)

だが、クロニアマンタルの出産に立ち会った父親は本当の父親ではない。本当の父親は母親が街道を自転車で走っていた時に、偶然、出会った旅まわりの楽士ヴィエルセラシ・チゴボット Viersélin Tigoboth なのである。

つまり、この作品では、父親は旅まわりの楽士であり、母親は出産後に死亡する。そして主人公は8月26日に届出された私生児なのである。

この主人公の出産に立ち会った父親はパリの劇場で、偶然、母親と知り合った男で名家の出身の男爵なのだが賭博好きである。ここにはアポリネールの第二の父親ジュール・ウェイルとの相似が見られる。作品の中の第二の父親は賭博で破産し、ピストル自殺する。クロニアマンタルは第三の父親に引き取られる。この男はオランダ人で婚約を取り消されてふさぎこんでいた。彼は田舎に引きこもり、まったくの偶然から自分の子供となったクロニアマンタルを自然の中で教育するが急死する。そしてクロニアマンタルはパリに出てくる。この部

分はアポリネールが母親アンジェリックと共にパリに出てくる以前の生活に対応する。

自伝的な作品の中で、アポリネールは1) 私生児であること、2) 実父が確認できないこと、3) 現実には父親の役割をしている男が存在していたことを認め、結局は、明らかに示している。

最初に引用した『腐ってゆく腐術師』では父親は「悪魔」であり、『虐殺された詩人』では、「旅まわりの楽士」である。悪魔は伝説の中の存在であり、旅まわりの楽士は現実の人間である。しかし、旅まわりの楽士は、今どこにいるか知りようがない。すなわち、現実としては不在なのである。この不在を埋めるために、アポリネールは非現実と現実を結びつけなければならない。

また、まだ子供だったアポリネールには生活上の父親の存在を否定することは不可能である。それでも、その人間を父親として認めることができない。生活上の、つまり、現実の父親は、常に、その背後に、非現実の父親を持っていたのである。

## II

『影の散歩』La Promenade de l'ombre は、1918年3月25日エクセルシオール紙Excelsiorに発表された。この作品は戦争で死んでしまった男の影だけが生き残っていて婚約者の住んでいる街を歩きまわるという筋立てになっている。作品の最後の部分は以下の通りである。

私は死というものがどれほど無駄なものかをはっきりと知った。死は現実の存在を少しも弱めるものではないということ。死者たちとは、今この世にいない者たちということではない。

この小さな街の通りを歩きまわっていた、完全に元のままの、そして孤独なあの影は、私たちの記憶に輪郭をひとつひとつ、すべて浮かび上がらせることができるし、また、その青みがかった微妙さそのものが思い出と結びついている心の中にある影と同じようにあの影は現実性を持っている。

je compris combien est vaine la mort et qu'elle atténue à peine la présence. Ceux qui sont morts ne sont pas des absents.

L'ombre intacte et solitaire qui parcourait les rues de la petite ville n'a pas moins de réalité que l'ombre intérieure dont nous pouvons suivre les contours projetés sur la mémoire et dont la subtilité bleuâtre épouse le souvenir. (註4)

ここでアポリネールが表明しているのは「心の中にある影」の持つ力が現実と非現実を結びつけるということである。この作品が発表される前のことであるが、アポリネールは、初めは「超・自然主義」sur-naturalisme、「超・現実主義」sur-réalismeという単語を使っていた。そして、間もなく「超現実主義」surréalismeという単語が生み出されたのだった。

1910年2月4日パリ-ジュルナルParis-Journal紙に発表された『オノレ・シュブラックの失踪』La Disparition d'Honoré Subrac は、壁や塀に貼りついて見えなくなってしまう能力を持った男が、彼が消えた壁にピストルの弾を撃ちこまれて、そのままになってしまうという短篇だが、この作品では、主人公の超現実的な能力は「自然」という母親に与えられたことになっている。

『自然は、いわば、良い母親なんだよ。自分の子供たちの中で、いろいろな危険に脅かされていて、それなのに身を守ることができないような弱い子には、まわりの物に混り合ってしまう力を与えてやってるんだよ。……』

La nature est une bonne mère. Elle a départi à ceux de ses enfants que des dangers menacent, et qui sont trop faibles pour se défendre, le don de se confondre avec ce qui les entoure... (註5)

1916年10月16日メルキュール・ド・フランス誌le Mercure de Franceに発表された『月王』Le Roi-Luneは、作者自身が作品の中で書いているように、一種のユートピア小説で、作者の思いついた機械がいくつも登場する。

機械のことはよく分からないので、この装置の性能についても、その構造の裏付けとなっている理論的根拠についてもくわしく述べられないし、この装置の外観には、何も超自然的なところはなかったが、この装置を使うとどんなことができるのかを考えてみた。

この機械の機能として、ひとつは、時間の流れの中から、空間の一定部分を抽出して、一定時間だけ固定するのである。装置が非常に強力なものではないので、固定できるのは、ほんの二、三分間である。もうひとつの機能として、再生された時間を（装置に付いている）ベルトを身につけている者に見えるように、触れられるようにするのである。

Peu au fait de la mécanique, il me serait difficile de m'étendre sur les caractéristiques de l'appareil et sur les données théoriques qui avaient présidé à sa construction. Toutefois,

comme son apparence n'avait rien de surnaturel, j'essayai de me figurer l'opération à laquelle il présidait.

Cette machine avait pour fonction: d'une part, d'abstraire du temps une certaine portion de l'espace et de s'y fixer à un certain moment et pour quelques minutes seulement, car l'appareil n'était pas très puissant; d'autre part, de rendre visible et tangible à qui ceignait la courroie la portion du temps ressuscitée. (註6)

ここでは、もはや、超現実を作り出すのは自然ではない。機械、すなわち、人間の作り出した装置である。そして、アポリネールは次ぎつぎに現実を乗り越える装置を発明する。

### III

超現実的な結果を作り出す装置としては、1910年に刊行された短篇集「異端教祖株式会社」*L'Hérésiarque et Cie*に収められている『贗救世主アンフィオンあるいはドルムザン男爵の冒険と物語』*L'Amphion Faux-messie ou histoires et aventures du baron d'Ormesan*にも、送信機と受信機を使って、音声や映像だけではなく、触覚の対象となり得る肉体を移送する機械が描かれている。当時の無線電話、電送写真、立体写真、映画、蓄音機などから「触知可能な物体の移送」を思いついたことは、アポリネールの才能と言わなければならない。

しかし、その装置の発明者が「贗」救世主と呼ばれているのは何故だろうか。作品の主人公ドルムザン男爵は身分を偽っているし、窃盗犯であり、殺人犯であり、妻を欺き（生まれた子供には他人の名前をつけ）、装置によって獲得した遍在能力を使って世界の王になろうとしている。ドルムザンの友人である「私」は、その不道德な行動を批判し、激怒してドルムザンを射殺する。この主人公、ドルムザン男爵 d'Ormesan は最初、オルメスパン Ormespant となるはずだった。この Ormespant という名はアスペルモン Aspermont (アポリネールの実父の名) のアナグラムである。

ついに自分の子であることを認知しなかった実父への思いが、この作品においても、アポリネールを動かしていたことは明らかであろう。(続く)。

註

1. Œuvres complètes de Guillaume Apollinaire. André Balland et Jaques Lecat. PARIS. 1965. vol. 1, p.711.
2. 同書, p.55.
3. 同書, p.243.
4. 同書, p.461.
5. 同書, p.184.
6. 同書, p.302, 303.